

轉じた。後金澤に出で、湯原八之丞の屋敷に寺を建てたが、元利元年今の地に徙らしめられた。

**ポンドウ 梵童** ↓テンガンポンドウ 天出梵童。

**ホンドリ** 本土寺 鹿島郡西馬場に在つて、日蓮宗に屬する。正安二年乘純開基。能登名跡志に『龜在山本道(土)寺とて日蓮宗あり。後の山を筒ヶ岑といふ。日像の上人開基の寺也。寺中に題目石とて石塔あり。則日像上人の書き給ふといへり。此石塔をかきて水に入れ呑めば、癩病其外諸の難病治する故に、石塔の面かけて過半ありといへども、題目の文字石に入て失る事なし。奇特なる事なり。此寺は昔二宮村に加賀左衛門・北左衛門とて二人あつて開基の寺なり。日像上人を石動山の衆徒にくみて仇をなせし時、此兩人懇命に働き、此寺を建立して上人を置奉りし也。』とある。日像の遺蹟に、乗純が寺を建てたのであらう。

**ホンナ** 本名 羽咋郡館内の小字。  
**ホンナミコウホ** 本阿彌光甫 前田利常が小松在城の頃から刀劍の主人を命ぜられ、綱紀の時に及んでも亦その用を承つたから、京都から時々金澤に来て留置したと見える。延寶の金澤圖に、仙石町の中程東側の邸地に本阿彌光甫と書いてある。

**ホンネンジ** 本念寺 羽咋郡羽咋に在つて、眞宗東派に屬する。初め眞言宗で、羽咋神社の別當であつたが、文明中丁祐といふ者眞宗に轉じた際、神職宮谷氏と争論して、宮谷氏は同郡深江村に轉じた。諸家分派系圖に、從佐宣證(慶長十九年得度)の時初めて東派となつたとする。藩政中羽咋郡中同派の觸頭を命ぜられてゐた。

**ホンノウ** 本納 ↓ハンノウ 半納。

**ホンバンケイフリヤク** 本藩系譜略 一冊。享保九年齊地禮幹著。一名前田家御系譜又は齊地本御系譜。巻初に管公略傳を載せ、次いで利家から歴世の履歷を記する。終に支流・親戚の譜もある。今存する本は書體があつて、種々になつてゐる。

**ホンパンリヤク** 本藩略譜 十一冊。湯淺進良著、男祓庸編定。一名本藩御譜。利家から齊泰まで、及び夫人・公子・支藩の譜である。湯淺本御系譜と稱するものも亦是である。弘化二年祓庸御書物奉行となり、藩庫の諸記録によつて前田家正系譜一冊を撰び、更に本藩略譜を本藩歴譜として、正系譜の参考に添へることにした。

**ホンパンレキフ** 本藩歴譜 二十三冊。加賀藩御書物所の編纂に係るもので、藩公歴世の編年紀錄であり、之に附するに公族譜と稱して分支諸家の系譜を以てしてある。  
**ホンパンレキフ** 本藩歴譜 ↓ホンパンリヤク 本藩略譜。

**ボンフ** 凡夫 小松の俳人。所居を俄庵といふた。安永九年ゆきのこゑ二冊を出版した。傳不詳。

**ホンブクジ** 本福寺 石川郡八日市新保に在つて、眞宗東派に屬する。

**ホンブクジ** 本福寺 河北郡北中條に在つて、眞宗東派に屬する。

**ホンボウジ** 本法寺 金澤高道新町に在つて、松倉山と號し、日蓮宗に屬する。天正十五年日隨越中前川郡松倉に創建し、後金澤に

來り、前田利常から寺地を賜はつて下堀川に草庵を結んだが、後更に今の地に轉地せしめられたものといふ。

**ホンボウジヨジコウ** 本邦叙次考 ↓エツトガサンシユウシ 越登賀三州志。

**ホンボウタノスケ** 本保雅樂助 加賀藩末の士で、大小將組に屬し、武藝も能くしたが、美服を好み、風雨の時はその汚損するを恐れて襦袢に乗つた。廢藩後には紫縮緬の衣服に丸紵の帯を締め、黒天鷲絨の羽織を着流し、紫の網打紐を以て髪を結び、二名の妾に美服を纏うて侍せしめ、外出には下僕をして床几を携へしめた。世人よつて之を伊達本保或は歌舞伎業平とも呼んだ。雅樂助の世系は今之を明らかにせぬ。

**ホンボジエモン** 本保治右衛門 初名大藏。四千石を受け、御小將頭に任じ、後隱居して有齋と號した。元和九年歿。子孫相繼ぐ。

**ホンボチカノリ** 本保樂禮 通稱監物、常右衛門。以守の養子。寛政六年遺知千八百石を襲ぎ、境御關所奉行・組外番頭・御先簡頭に歴任し、天保三年歿。

**ホンボナガマス** 本保長益 通稱三郎兵衛。祿千石。長益字は子謙、梅嶺と號し、新居を敬聚齋といふた。白石・鳩巢二先生と唱和し、その詩は江村北海の日本詩選に見える。長益小瀬桃溪と斷金の交をなし、桃溪の歿後遺稿を集めて二冊となし、之を世に傳へた。享保十三年歿。長益の子儀右衛門、幼にして父の祿三の一を襲いたが、十五年二月五歳で早世し、爲に絶炊した。

**ホンボモクノスケ** 本保木工之助 家譜には木工に作る。本保治右衛門の二子。祿五百

石。慶長十九年の役に小々將番頭として出征し、再役には齊屋口侍町で首一つを獲たが、後に藩侯の參勤に従ひ、越後で洪水に溺死して絶炊した。

**ホンボユキサネ** 本保以守 通稱李之助・十太夫。所居を離側軒といふた。本保三郎兵衛長置の二子で、寶曆二年本家常右衛門敬止の家祿千八百石を繼ぎ、馬廻組に班し、御作事奉行・物頭並・御勝手方に歴任し、天明六年九月遠慮を命ぜられ、寛政三年御先簡頭となり、六年二月十五日七十歳を以て歿した。嘗て京都の西村優介遠里に就いて象緯術數の學を受け、又測遠山崎流の蘊奥を極め、寛政四年藩校明倫堂の開かれた時天文學の教授を擔當して加州改算階推歩法・加州改算階立成を著し、又建築の理に詳しく、造作辨二卷・燈前雜語を編し、傍ら一粒金丹を調劑した。

**ホンボユキツネ** 本保如恒 通稱三四郎・七左衛門。父岸右衛門から配知二百石を受け、享保八年柳原御前御用人となり、俸五十石を増し、延享二年同御附物頭並に進み、四年十一月十八日五十五歳を以て歿した。

**ホンマ** 本馬 驛馬に本馬と輕尻の別があつた。藩末の規定によれば、駄荷本馬は三十六貫目小付共外に四貫目用捨、但し四個附にて過目となる時は輕尻二疋、又小付にて過目となれば人足一人を立てること。乘懸本馬は二十貫目小付共外に四貫目用捨、但し過目となる時は人足一人を立てること。駄荷輕尻は十八貫目小付共外に四貫目用捨、但し過目となる時は本馬とすること。乘懸輕尻は五貫目小付共外に三貫目用捨、但し過目となる時は乘懸本馬とすることであり、人足一人は五貫